

幕末の偉人たちに学ぶ経営戦略

2016年度 春季大会 記念講演

歴史コメンテーター / 一般財団法人日本普及機構代表理事 / 歴史作家・歌舞伎狂言作者 / 日本史講師 (東進ハイスクール) **金谷 俊一郎** 氏

かなや しゅんいちろう 京都府生まれ。1991年より東進ハイスクールにて日本史トップ講師として活躍。近年は特に、偉人から学ぶ経営に関する話や日本の世界遺産、各地域の歴史の話で人気を博しており、そのわかりやすい説明はテレビ・ラジオ・講演会で反響を呼んでいる。学習参考書のみならず、バリエーション豊かな一般書にも人気がある。主な著書に『日本史B一問一答 完全版』『日本人の美徳を育てた「修身」の教科書』『西国立志編』『日々の教え 童蒙教え草』『全国・最強お利益パワースポット巡り』『名もなき偉人伝』『真龍馬伝』『日中韓 教科書読み比べ 歴史認識の違いはこうして生まれる』がある。



日本人のすばらしさを伝えたい

私は、普段は東進ハイスクールというところで講師をしておりますが、それと同時に全国の様々な場所で講演もさせていただいております。講演をする理由は、政治や経済、外交を行う上ですべての前提となる日本という国の歴史についてしっかり知っていただきたいからです。

例えば、江戸後期に活躍した伊能忠敬については、勉強をされた方なら『大日本沿海輿地全図』を作製した人と答えられるでしょう。しかし、人名や地図の名前だけを覚えるほどつまらない勉強はありません。大切なのは、伊能忠敬という人がどのくらいすごい人だったのかを知ることです。伊能忠敬は「ヨーロッパよりも正確な地図を作った」のです。当時ヨーロッパの地図の誤差は、現在の地図と比べて0.5%。それに対して伊能忠敬の地図は0.2%です。外国よりも正確な地図を、鎖国してヨーロッパからの技術が入ってこない環境で作製

している、そこまで知っている方は意外と少ないのです。

私は、子供たちが自国の歴史に目を向けられるように、すばらしい日本人や日本の歴史を紹介したいのです。



驚くべき日本の技術力

日本の技術力を語る上で、まずご紹介したいのは、田中久重です。この人は東芝の創業者ですが、からくり時計を作ったことから「からくり儀右衛門」とも呼ばれています。彼は、1851年、ペリーが来る2年前に、和時計と洋時計の両方の機能を持つ「万年時計」を作りました。日の出と日没の時間により毎日時間の長さが変化する日本の時間の区切り方を、文字盤を自動で動かすことによって昼夜の長さを調節する仕組みを考案しました。これだけでもすごいことですが、さらに彼は、十干十二支、月齢、二十四節気までも自動で表示できるようにしました。これを、ペリーが来る2年前に行っているのです。「日本は鎖国をしていたためヨーロッパから何百年も遅れていた」という





のが、一般的な小学校、中学校、高等学校で習う歴史の内容ですが、実際の日本は、ヨーロッパでも考えられないようなテクノロジーをすでに持っていたのです。

また、日本はヨーロッパの技術を取り入れて近代化したと思われていますが、実はすべて日本流にアレンジしているのです。昨年、明治日本の産業革命遺産が世界遺産に登録されましたが、その特徴は、日本独自の力で発展させたことです。例えば、伊豆の葦山反射炉は、ヨーロッパに対抗するために密かに造られたものです。ここがほかの国と違うところで、自国の力で発展させていった近代化は、世界でも例を見ないことです。日本にはそれを成し遂げるだけの非常に高度な技術力があつたということを知っていただきたいのです。



岩崎家を支えたもの

幕末の偉人として有名な一人に、三菱財閥の創業者、岩崎弥太郎がいます。弥太郎は三菱商會を二つの柱を軸として大きくしていきました。まず一つは「商人は商人らしく」ということ。もう一つは「商人は商人らしくしない」ということです。相反する言葉ですが、その意味は、商人は常に前垂れをかけて、外出時には法被を着ること。つまり、商人らしく振る舞えということ。社員に庶民的な感覚を持たせる一方で、弥太郎は明治政府の最高権力者となった大久保利通と手を組みます。政治家と結びつくことによって、政商として力を持つていくのです。大久保利通亡き後は、大隈重信に取り入りますが、大隈の罷免によって弥太郎は後ろ盾を失います。そこに反三菱財閥勢力の三井が共同運輸会社を作り、三菱つぶしに攻勢をかけてきます。彼はライバル会社に対抗するために、運賃を2割引にし、さらに船の運送速度を無理やり速くするというライバル競争を始めます。その戦いの最中に、弥太郎は52歳でその生涯を終えます。

弥太郎の後を継いだ弟の弥之助は、「三菱の事業は一門のためではない。国家のことを考えず岩崎家のみを考える者があつたなら、三菱はつぶした方がよい。そのために、不毛な競争をなくそう」と、土佐藩の幹部、後藤象二郎に働きかけ、共同運輸会社との合併

を模索し、日本郵船会社をつくりました。これは、共同運輸会社の方が強い合併でしたが、次第に三菱の会社ようになっていきました。なぜなら、三井側はあくまでも政治家とうまく手を組むという三菱の一面だけをまねていたからです。しかし、海運業は商売ですから、政治の力だけで何とかなるものではありません。商売のプロとしての知識や感覚が必要だったのです。



偉人たちの根幹にあつたもの

土佐藩と同じく、吉田松陰や伊藤博文など多くの偉人を輩出した藩に長州藩がありますが、私はその陰には藩主、毛利敬親の存在が大きく影響したと考えます。敬親は、家来が何を言っても「そうせい」としか言わなかったとして、「そうせい侯」などと揶揄されることも多いのですが、実は「そうせい」と言うことによって敬親は、下の意見をうまく吸い上げていく天才だったのではないかと、だからこそ長州藩があれだけ大きなことを成し得たのではないかとも思われるのです。

幕末、明治の人々の思いは、各人が残した言葉によく表れています。例えば、西郷隆盛は、「小人は己を利せんと欲し、君子は民を利せんと欲す。己を利する者は私、民を利する者は公なり。公なる者は栄え、私なる者は亡ぶ」と言っていますが、吉田松陰も同じような言葉を残していますし、財界でも岩崎弥太郎や渋沢栄一も同様のことを言っています。

伊能忠敬も田中久重も、偉大な経営者や政治家たちの根幹をなすものは国家でした。ここには自分だけが利するのではなく、国全体を盛り上げていこう、全体をボトムアップさせていくことによって、自分たちも向上していこうという意志が見えます。明治の経営者たちから学ぶべきことは、このことなのではないでしょうか。過去の偉人たちや歴史に目を向けると、いろいろと学ぶことができます。この講演が、そのことを知るきっかけになっていただければ幸いです。